

日本語における Disjunction の語用論的解釈： Accessibility を中心にして

原田 康也 (早稲田大学) ・ 本多 久美子 (早稲田大学非常勤講師)

1 はじめに

日本語の「か」をともなう disjunction [α か β (か)] には¹, “or”-reading disjunction と “and”-reading disjunction の用法がある². この2つの用法の違いは, 状況間の到達可能性 accessibility の違いとして理解することができる. 本稿では, 「か」をともなう disjunction が, 状況に応じて, “or”-reading としても “and”-reading としても解釈される事例を検討することによって, こうした解釈の相違を生じさせる語用論的要因について, 以下に若干の考察を試みる.

2 Disjunction I: “and”-reading disjunction

「か」をともなう disjunction のうち, “and”-reading disjunction として解釈される表現の中には, 話し手が選択許可を与え, 聞き手がその選択肢の中からいずれか一方を自由に選択することができるといった自由選択性を含意するものが多く見受けられる. 一方, “or”-reading disjunction として解釈される表現には, このような自由選択性は見られない. こうした相違に留意しつつ, ここではまず, “and”-reading disjunction として解釈される事例について検討してみよう.

図1のような空港がある. この空港には, 入国管理ロビーから到着ロビーへの出口として, 西ゲートと東ゲートの2つがあり, 到着便の客は, 入国管理ロビーで手荷物検査を受けたあと, これらの出口を通して到着ロビーに出ることができる. 今, 入国管理ロビーで, 1人のツアー・コンダクターがこれから手荷物検査を受けようとするツアー客に向かって次のように話している.

(1) 西ゲートか東ゲートから到着ロビーに出られます.

この(1)は, 西ゲートか東ゲートのいずれか一方が利用可能なことを意味するものではなく, 個々のツアー客にとって2つのゲートが等しく利用可能なことをあらわしている. ここで, (1)の発話の含意を考えてみよう.

(2) (i) 客は, 西ゲートから到着ロビーに出る, ということが可能である.

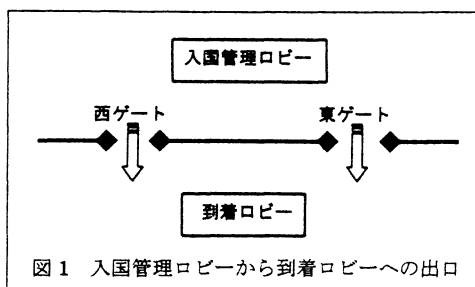


図1 入国管理ロビーから到着ロビーへの出口

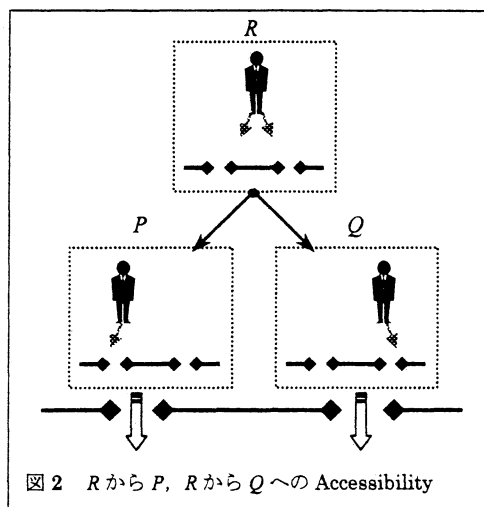


図2 RからP, RからQへの Accessibility

(ii) 客は, 東ゲートから到着ロビーに出る, ということが可能である.

(iii) 客は, 到着ロビーに出る方法として, 西ゲートから出る方法と東ゲートから出る方法のいずれを選択することもできる.

(iv) 客は, 実際に到着ロビーに出るためには, 西ゲートから出る方法と東ゲートから出る方法のいずれか一方を選択しなければならない.

ここで, (i)と(ii)は, (1)における2つの disjuncts に相当し, この(i)と(ii)から(iii)が導かれる. また, 実際に到着ロビーに出るという行為を実現するという点では, (iv)の含意が派生すると考えられる³.

¹ 「か」は, disjunctive coordination に限らず疑問文等においても用いられるが, 本稿では, こうした「か」を同一の語彙的要素と考え, その語彙的意味を partitioning と仮定している. Harada & Honda (2000)を参照されたい.

² 日本語の「か」をともなう disjunction に限らず, 例えば, 英語の“or”をともなう disjunction にも, 同様の2種類の用法が認められる. Kamp & Reyle (1993), 原田・本多(2000)等を参照されたい.

³ (2)の(iv)に示したように, (1)では, 2つの disjuncts の同時的な成立は考慮対象とならないが, 事態の性質によっては, 2つの disjuncts の同時的な成立が妨げられない場合がある.

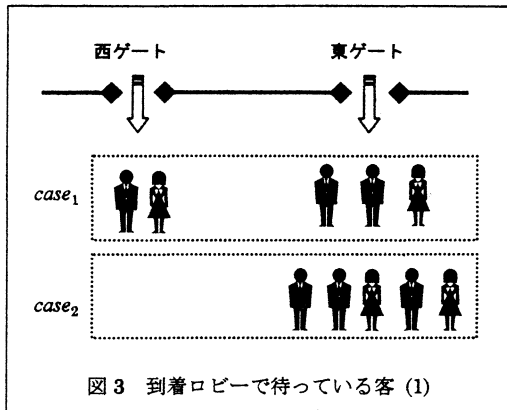


図3 到着ロビーで待っている客 (1)

図2では、(1)の発話時点における客の状況を R とし、(2)の(i)に示した可能性を \swarrow 、(ii)に示した可能性を \searrow としてあらわしている。また、 P は、客が西ゲートを通ろうとしている状況を、 Q は、客が東ゲートを通ろうとしている状況をあらわし、 R から P 、ならびに、 R から Q へ到達可能 accessible であることを簡略に示したものである⁴。ここで注意すべきは、 R における状況である。個々の客は、 R において、「西ゲートを通る可能性」と「東ゲートを通る可能性」の両者を、ともに確定性 determinacy のある可能性としてもっている。この2つの可能性はそれぞれ、 P 、 Q における可能性に相当するが、このことは、 R において $P \wedge Q$ が成り立つことを示している。これが(1)における“and”-reading disjunction に他ならない。さて、(1)に続けて、ツアー・コンダクターが次の発話を行ったとしよう。

(3) 西ゲートか東ゲートを出た所で待っていて下さい。

ここでも、ツアー客は、いずれか一方のゲート前で待つことを指示されたわけではなく、2つのゲート前のどちらで待っていてもかまわないという指示を得ている。こうした指示を受けて、ツアー客の集合のメンバー $\{M_1, M_2, M_3, M_4, M_5\}$ がどのように行動したかを見てみよう。

図3の $case_1$ では、ツアー客の集合は西ゲートと東ゲートに分布している。一方、 $case_2$ では、ツアー客の集合は東ゲートのみに集中している。しかしながら、いずれのケースにおいても、個々のツアー客は、ツアー・コンダクターの指示に従い、その結果、図2に示した R の状況から P または Q へと推移したにすぎないのである⁵。

(a) 応募者は、区内に在住する者か区内に勤務先を有するものに限られる。

この(a)で「応募者」としての資格を有するのは、{区内に在住する者}、{区内に勤務先を有する者}、{区内に在住する者&区内に勤務先を有する者}となる。

⁴ 到達可能性 accessibility を、ここでは次のように定義する。ある状況 S_1 から他の状況 S_2 への推移が妨げられないとき、 S_1 から S_2 へは到達可能 accessible である。

⁵ ツアー客の集合が singleton set の場合も、事情は変わらない。既に見たのと同様の発話状況において、(1)と(3)

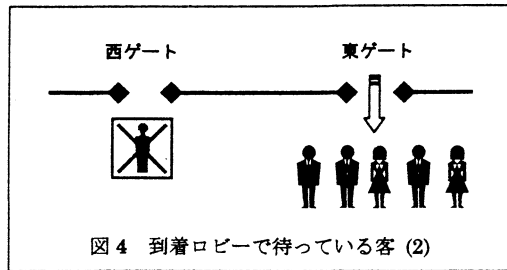


図4 到着ロビーで待っている客 (2)

Grice 流の会話の公準から、(1)と(3)について考えると、いずれの事例においても、「西ゲートか東ゲート…」という disjunction は、西ゲートを通ることと東ゲートを通ることのうち、いずれか一方が成立すればよいという情報を与えることになり、結果の如何に関わらず、disjunction を用いた言語表現として informative であると言える。

3 Disjunction II: “or”-reading disjunction

前節で見た発話状況とは異なる事例を考えてみよう。この空港には、入国管理ロビーから到着ロビーへの出口として西ゲートと東ゲートがある。現在、この空港は、改装工事中であり、工事の便宜のため、時間帯によって、西ゲートと東ゲートのいずれかのゲートが閉鎖されている。こうした状況で、次の発話が行われたとしよう。

(4) 西ゲートか東ゲートから到着ロビーに出られます。

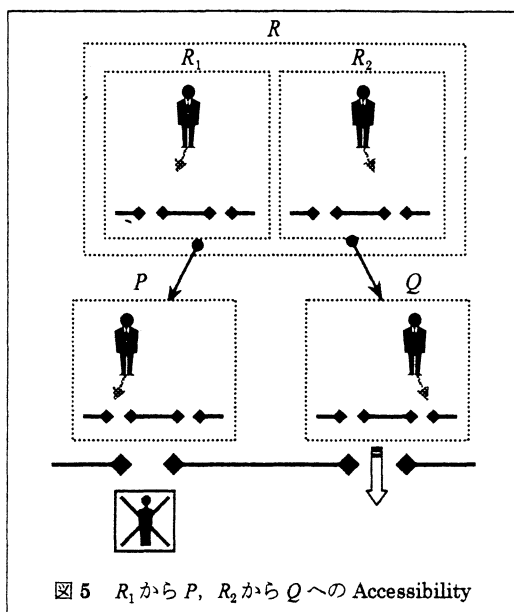
西ゲートか東ゲートを出た所で待っていて下さい。

前節で見た発話状況では“and”-reading disjunction として解釈された同じ表現が、(4)の発話状況では、“or”-reading disjunction として解釈されることになる。

ここで、ツアー客のメンバーの行動結果を見てみよう。図4に示したメンバーの行動結果は、図3の $case_2$ に類似するように見える。しかしながら、図3における発話状況が、西ゲートと東ゲートの両者が利用可能であったのに対して、図4における発話状況は、西ゲートが閉鎖されており、東ゲートのみが利用可能だというものである。こうした発話状況の違いをふまえて、(4)のような発話状況をもつ事例における状況間の到達可能性 accessibility について見てみよう。

図5は、(4)の発話状況における、 R 、 P 、 Q の状況間の accessibility を簡略に図示したものである。前節の図2における R が西ゲートを通る可能性と東ゲートを通る可能性をあわせもっていたのに対して、図5における R は、西ゲートを通る可能性のみをもつ R_1 と、東ゲートを通る可能性のみをもつ R_2 とに分割されている。これは、 R_1 と R_2 のいずれかが成立すること、すなわち、 $R_1 \vee R_2$ であることをあらわしている。また、図2の R における \swarrow と \searrow が確定性 determinacy をもつ可能性であったのに対して、図5の R_1 における \swarrow と R_2 における \searrow は、

が1人の客に向かって発話された場合においても、これらの表現は“and”-reading disjunction として解釈され、そこには、図2と同様の accessibility が認められる。

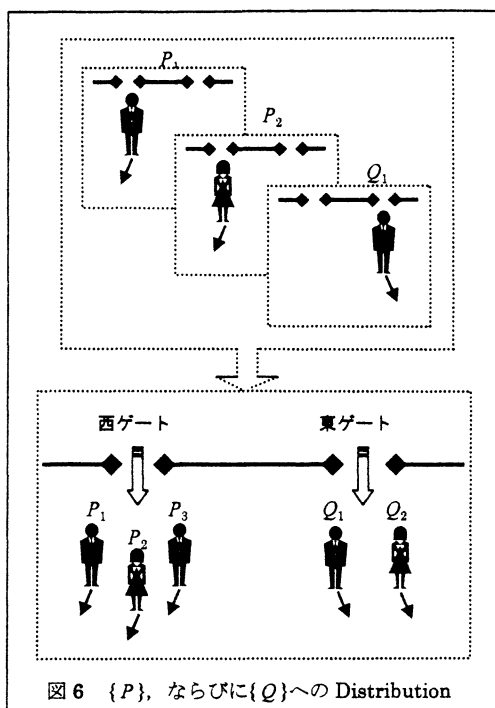


ともに不確定性 indeterminacy をもつ可能性となっている。ここで、(4)の第1文の発話の含意を考えてみよう。

- (5) (i) 客が西ゲートから到着ロビーに出る、ということが可能であるか否かは不確定である。
- (ii) 客が東ゲートから到着ロビーに出る、ということが可能であるか否かは不確定である。
- (iii) 客が西ゲートから到着ロビーに出ることと、東ゲートから出ることのうち、いずれか一方が実現するということは、確定性をもつ。
- (iv) 客は、到着ロビーに出るための方法として、西ゲートから出る方法と東ゲートから出る方法のいずれか一方を自由に選択することはできない。

この(5)の(i)と(ii)があらわしているものは、(4)の発話状況において、発話者が、西ゲートが利用可能であるのか東ゲートが利用可能であるのかについて、確定性のある情報をもっていなかったというものである。ここで唯一確定性をもつものは、 R_1 と R_2 のいずれか一方が成立可能だという(iii)であり、これは、 $R_1 \vee R_2$ という“or”-reading disjunction に相当するものとなる。 R_1 と R_2 のいずれかが成り立ち、且つ、いずれが成り立つかが不確定であることは、そこに、 R_1 と R_2 をめぐる自由選択性がないことを意味する。語用論的な観点から言い換えるなら、(4)の発話状況における disjunction は、 R_1 と R_2 のいずれが成立するかは定かではないものの、いずれか一方が成立するという情報を与えることになり、この点で、“or”-reading disjunction としては informative であると言える。

このように、“and”-reading disjunction と“or”-reading disjunction の間には、状況間における accessibility の違いが存在する。こうした違いは、言語表現としての disjunction の違いに起因するものではなく、語用論的



な解釈の相違として扱われるべき問題であろう。

4 Disjunction III: Distribution

Disjunction をめぐる問題については、前節までに見たような事態の実現可能性に言及する表現の他に、事態の実現結果に言及する表現について考察する必要がある。次のような状況を考えてみよう。

この空港には、到着ロビーへの出口として、西ゲート、東ゲート、北ゲートの3つの出口がある。ここで、到着便の客の行動を調査している市場調査員がいる。彼が、これら3つの出口の利用状況について、次の一文を調査報告書に書いたとしよう。

- (6) 到着便の客の92%は、西ゲートか東ゲートから出てきた。

この(6)もまた、“and”-reading disjunction として解釈される事例であるが、この(6)の発話が有意味になるのは、西ゲートを利用した客と東ゲートを利用した客がいて、且つ、それらの客の総数が全利用客の92%を占めている場合である。ここでは、西ゲートの利用者だけで92%を占める場合と、東ゲートの利用者だけで同様に92%を占める場合は除外されることになる。同じく、“and”-reading disjunction として解釈された(1)や(3)の事例では、図3の $case_1$ と $case_2$ は、ともに実現結果として許容されたが、この(7)は、図3の $case_1$ に相当するような実現結果のみを許容するのである。

この(6)に見られる分布 distribution の過程を図示したものが、図6である。ここでは、ある客が西ゲートを利

用したことを \blacktriangledown で示し、それらの客の集合を $\{P_1, P_2, P_3, \dots\}$ として、また、ある客が東ゲートを利用したことを \blacktriangledown で示し、それらの客の集合を $\{Q_1, Q_2, \dots\}$ としてあらわしている。個々の客について、西ゲートと東ゲートのいずれを利用したかを図示したものが、図 6 の上半図であり⁶、これらの個々の事態を、該当するすべての客についての量化的事態として重ね合わせた時に、西ゲート利用者の集合と東ゲート利用者の集合の両者が conjunctive に存在することを図示したものが、図 6 の下半図である。この下半図に見られる分布が、(6)における“and”-reading に他ならない。

Grice 流の会話の公準から言い換えるなら、(6)における「西ゲートか東ゲート…」という disjunction は、個々の客について、西ゲートを通過することと東ゲートを通過することのうち、いずれか一方が成立しているという情報を与えることになり、実現結果がそのいずれであるかを問わず、disjunction を用いた言語表現として informative であると言える。さらに、(6)における 2 つの disjuncts は、事態実現の結果として、西ゲートの通過者集合と東ゲートの通過者集合という 2 つの集合が存在するという情報をも与えることになるが、この点においても、disjunction は informative であると言える。

また、事態の実現結果への言及が意図されるような発話状況では、客の集合が singleton set の場合は、“and”-reading ではなく、“or”-reading が選択される。

(7) その客は、西ゲートか東ゲートから出てきた。

ここで、「その客」が単数である場合、客のゲート通過について成立し得た事態は、西ゲートを通過したこと、ないし、東ゲートを通過したことのうちの 1 つに限られる。このような状況で、2 つのうちの 1 つが成り立つという解釈、すなわち、“or”-reading disjunction としての解釈は、(7)における disjunction を informative なものとする唯一の解釈となっている⁷。

5 おわりに

「か」をともなう disjunction は、発話状況に応じて、

⁶ (6)の発話状況は、個々の客が西ゲートを利用したか東ゲートを利用したかが確定性をもつような状況であるとも言えるが、(6)において重要性をもつのは、西ゲートと東ゲートのいずれかが利用されたという情報であり、そのいずれが利用されたかという情報ではない。

⁷ 次の例も、“or”-reading disjunction としての解釈が導入されやすい事例である。

(b) その団体客は、西ゲートか東ゲートから出てきた。

この(b)では、「団体客」という語彙的要素によって、「団体行動をとりやすいという集団」という解釈が導入されることによって、集団の個々のメンバーによる個別的な事態実現ではなく、集団の構成要素が集合的に関わるような単数の事態が成立するという解釈を得やすいものとなっている。そして、この(b)の解釈過程においても、「西ゲートか東ゲート…」という情報を informative なものとするために、“or”-reading が強制されると考えられる。

“or”-reading disjunction としても“and”-reading disjunction としても解釈されるが、こうした解釈の相違は、それぞれの発話状況における到達可能性 accessibility のあり方と相関をもつと考えられる。また、事態の実現結果に言及する表現では、事態量化的の有無によって、“and”-reading disjunction と“or”-reading disjunction の分化が認められる⁸。

本稿は、disjunction [α か β (か)] が基本的に α と β の partitioning をあらわすと仮定する立場にあるが、partitioning における排除的な α と β を融和するものが、可能世界への言及であり、また、事態量化的であるとも言える。本来排除的であるはずの α と β がその排除性を失うのは、言い換えれば、disjunction が“and”-reading disjunction として解釈されるのは、本稿のとりあげた事例にとどまらない。ここでは、そうした事例のすべてに言及することはできないが、関連する諸問題については、別稿で論じることとしたい。

参考文献

- [1] Gamut, L. T. F., 1991, *Logic, Language and Meaning*, The University of Chicago Press.
- [2] Grice, H. P., 1975, “Logic and Conversation,” in P. Cole & J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics, vol.3: Speech Acts*, Academic Press.
- [3] 原田康也・本多久美子, 1997, “Disjunction と量化: 「か」の並列と「と」の並列との交錯をめぐって,” ms.
- [4] Harada, Y. & Honda, K., 1999, “How Quantification Emerges in Natural Languages,” *Proceedings of the 2nd International Conference on Cognitive Science*.
- [5] Harada, Y. & Honda, K., 2000, “Accessibility among Situations: Pragmatics of Disjunction in Japanese,” *Proceedings of the 14th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*.
- [6] 原田康也・本多久美子, 2000, “Disjunction と量化: 日本語における量化表現の意味と解釈 その 4,” 紀要 55, 早稲田大学語学教育研究所.
- [7] Kamp, H. & Reyle, U., 1993, *From Discourse to Logic*, Kluwer Academic Publishers.
- [8] Kay, P., 1991, “Even,” *Linguistics and Philosophy*, 16, pp.589-611.

⁸ 2 節と 3 節では、未実現事態の成立に関わる予期的な可能性 prospective possibility について論じたが、4 節でとりあげたような過去の事象に関わる回想的な可能性 retrospective possibility が考慮対象となる事例もある。

(c) (当時利用可能なゲートは北ゲートと南ゲートの 2 つだけであったから) 犯人は、北ゲートか南ゲートから逃走した可能性がある。

この(c)では、犯人が北ゲートから逃走した可能性と南ゲートから逃走した可能性の 2 つが存在することがあらわされている。さらに、こうした retrospective possibility をあらわす表現においても、発話状況に応じて、“or”-reading と“and”-reading の両者が可能である。